

## 天理スポーツ シンポジウム⑫

「天理スポーツ シンポジウム 2011 未来を創る! ~天理障害者スポーツ~」の総括を掲載する。また、シンポジウムを振り返り、筆者の感想を述べる。

## &lt;総括&gt;

天理大学おやさと研究所長 深谷忠一

私も 60 年代にアメリカにいましたので、当時さまざまな建物にきちんとスロープがついていて、みんなが自分の意志で動いておられるという姿を見ております。その時代から思えば、日本の方もかなり様変わりしてそういう姿に少しずつ近づいているとは思っています。

今日、パネリストの皆さんにそれぞれの立場でお話をさせていただいたのですが、まだまだそれぞれお顔を見ていると、もっと言いたいことがあるというように伺えます。やはり、こういう所でもきちんと解決をしていかなければならない問題が山積しているように思います。しかし大変ありがたかったことは、結論的にそれぞれのパネリストが自分たちがまず努力をしていかなければならない。関わっている者が、あれが足りない、これが足りないと言うのではなくて、自分たちで道を開いていくという努力がまず大事だということを示唆していただきました。そういう点で、我々もこの問題に関わる一員として、できることからやらせていただかなければならないと思います。

今日はスポーツの話であったのですが、私の関係していた教会に音楽の先生がおられて、その音楽の先生が聴覚障害の人に教室やグループ、学校で音楽を教えています。全く耳が聞こえなくても音楽を教えて楽しんでもらえるのだったら、というような話も聞かせてもらいました。しかし、どう考えてもどうやってやるのかとイメージがわかなかったのですが、そういう文化の面でもさまざまなチャレンジと言うか考えられることもだんだんとできるようになっている。

要するに、われわれお互い、「一れつきょうだい」を実践する。おやさま教祖から教えていただいている「一れつきょうだい」という考えの元に、みんなそれぞれきょうだいでこの世に生かしていただいている喜びを味わえるような生き方を実践する。このごろ障害者という言葉が英語では challenged ということもありますが、いわば、神様から挑戦をするように立場を与えられた人、訳せばそういうようになるとは思いますが、みな、障害のある人もない人も神様からこの世で陽気ぐらしをその立場でそういう環境でやってみよと、こういうふうにお与えいただいているのだと思います。ですから、みんないろいろな立場で陽気ぐらしの世界が実現できるように、「一れつきょうだい」を実践していきたいということを申し上げて総括とし、ご挨拶とさせていただきます。本日はお忙しい中、また大変な中、おいいただきありがとうございます。また今後とも、よろしく願いたします。

## &lt;シンポジウムを終えて&gt;

このシンポジウムが開催された前日、東日本大震災が発生し、一時は開催が危ぶまれたが、何とか開催することができ、一安心した。

人がスポーツをする目的は人それぞれである。「勝負」、「記録の追求」、「健康づくり」、「仲間づくり」など様々である。これは障害があっても、なくても考えることは同じである。

しかし、一般的に、障害をもつ人の体力は、障害のない人たちと比較して低い水準にある。障害がある人は、機能回復訓練(リハビリテーション)の目的でスポーツを始めたり、障害による負担を軽くしたいという考えからスポーツをしたりする人もいる。

「障害のない人はスポーツをした方がよいが、障害がある人はスポーツをしなければならない」

この言葉は車いすマラソンの世界記録保持者、スイスのトップアスリート、ハインツ・フライ氏の言葉である。2008 年北京パラリンピックでは自転車競技(ハンドサイクル)で金メダルを獲得している。また、冬はクロスカントリースキーの選手としても活躍している。

筆者は 10 年ほど前、ハインツ氏の考え、ならびに仕事や生活について調査するため、スイスまでハインツ氏の職場を訪ねたことがある。ハインツ氏はトップアスリートとして活躍する中、障害者スポーツ発展のために後進の指導や社会的活動を積極的に行っている。現在も現役のトップアスリートである。

スポーツをしたくても障害があると、その障害を悪化させるのではないかという不安や、街中にある障害、コミュニケーションがとりにくいなど、始めることを躊躇してしまいがちである。こういった悩みを解決するために、多種多様で程度によって異なる障害にあわせ、それぞれに適切な指導ができる人材が必要である。

障害をもっていても既存のスポーツのルールや道具を少し工夫することで、多様な人々に適応させた、アダプトさせたスポーツができる。天理にはスポーツを指導するノウハウをもった人材がたくさんいる。ちょっとした工夫をすることで多くの人々がスポーツをすることができるのである。障害をもった人たちは、身近なところに自分にあつた、適切な指導をしてくれる指導者がいれば安心してスポーツができるのではないだろうか。このノウハウを生かし、あらゆる人にスポーツを楽しんでいただくことで、天理から多くの笑顔を発信することができればと願っている。



北京パラリンピック大会で金メダルを獲得した  
ハインツ・フライ氏と筆者  
(2008 年 9 月、北京パラリンピック会場にて)